

学校教育目標		自他のよさを尊重し、豊かな心と健康な身体をもち、主体的に学び合える児童の育成		重点目標		◎感謝の心をもち、進んで行動する子どもの育成 ○考えをつなぎ、根拠をもとに表現できる子ども ○感謝の心を大切にし、互いを認め合い支え合える子ども ○次につながる目標をもち、粘り強く最後まで取り組む子ども			
評価計画				自己評価		学校関係者評価		改善計画	
重点目標	目標達成のための方策(取組指標)	成果指標	評価	結果(成果○と課題△)	評価	コメント	改善計画		
重点目標に関する評価	① 「分からないこと」をはっきりさせて、本時のめあてをつくらせる。「分かったことの内容と方法」をまとめて書かせる子ども	○ 「学習指導」アンケートで担任の成果評価5段階3.5以上	4	○ 毎月行う職員研修(MCAの会)で共通の取組を継続することにより、児童の言葉によるめあてづくりや内容と方法の振り返りが日常化してきた。	A	・学校の自己評価は適切である。 ・高学年の学力を県平均まで上げていただいたことに深く感謝している。 ・子どもたちは落ち着いて授業に臨んでいた。話を聞く姿勢がずいぶんよくなった。	・思考力・判断力・表現力を身につけさせるために自分の考えを書き表すことを共通実践していく。 ・基礎・基本を定着させるために、みなとタイムや家庭学習を活用し、国語の読み・書き、算数の計算問題や文章題を中心に計画的に取り組む。		
	② 「朝の活動」「みなとタイム」の計画的実施と教材の活用や指導体制づくりにより、基礎・基本の確実な定着を図る。	○ 全学年の国語・算数業者テストの観点別平均87%以上の達成	3	○ 少人数授業や理科専科(高学年)の授業によって一人一人に応じた支援ができ、学力向上に繋がった。	A	・現代の学校での先生の活動は多岐にわたり、ベテラン教員の減少、若手教育の増加で指導技術のアンバランスが生じているのではと心配している。	・「海洋教育」では、体験活動を重視し、P D C Aサイクルを機能させながら子どもの思いを大切にしながら学習を展開していく。		
	③ 「海の時間」において新しい時代に必要な資質・能力を高め、自分の行動変容の必要性について考えさせる。	○ 6年生の児童を対象にしたアンケートで、4段階3以上	3	○ 「7つの目標」の教室掲示と全職員による徹底した指導により、学年に応じた学習規律や学び方が身につけてきている。	A	・先生方が同じ気持ちで取り組む、徹底したことで成果が表れたのではないかと感じている。中学校も参考にしながら取り組んでいきたい。	・家庭学習強化週間以外でも日頃から子どもたちが家庭学習に継続的・意欲的に取り組むことができるよう、小中連携して取組を進めていただきたい。家庭での学習は非常に重要であるので、子どもたちの学習意欲の向上のため、次の一手をお願いしたい。		
	④ 個々の課題に応じた家庭学習を促進するとともに、「家庭学習強調旬間」の取組で家庭学習の習慣化を図る。	○ 家庭学習カードによる自己評価項目「自分から進んで家庭学習に取り組んだ」で90%以上	4	△ 家庭学習に取り組む姿勢に個人差が大きいので、個別に対応する必要がある。	A				
	⑤ 生活規律「7つの目標」で、特に「挨拶・丁寧な言葉遣い・返事」を徹底する。	○ 「7つの目標」アンケートで担任の成果評価5段階4以上、児童による自己評価4段階3以上	4	○ 「自分からあいさつしましょう」を徹底したため、進んで挨拶ができる児童が増えた。	A	・学校の自己評価は適切である。 ・子どもたちが学校に来た時も気持ちよく挨拶をしてくれる。	・相手を思いやる声かけや笑顔で挨拶ができるように、学校はもちろん、PTAとも連携して取り組むようにする。		
	⑥ 道徳科の授業づくりを充実させ、思いやりや感謝の心を育てる。	○ 教師の見取り(教育活動評価)で、4段階3以上	3	○ 児童会による「笑顔郵便」の取組により、思いやりや感謝の言葉かけが同学年間だけでなく異学年にも広がりが支持的な人間関係づくりに繋がった。	A	・道徳教育のためのマスメディア活用を考える必要があるのではないだろうか。また、言葉遣いや規範意識など、家庭と地域の環境づくりも必要。	・異学年児童の人間関係をより良好にするため、「縦割り清掃」や「縦割り遊び」の充実を図る。		
	⑦ 異学年との交流を充実させ、心を通わせることで感謝や思いやりの気持ちをもたせる。	○ 学校生活アンケートで、「友達との関係」が1.1以上	4	△ 人間関係づくりが苦手な児童がいるので、授業の中で児童同士の関わりを深めていく必要がある。	A	・自尊感情(自己概念)を高めていくために児童会の取組は大切だと思う。今後、自尊感情(自己概念)の向上に焦点化し取り組んでいくのもいいのではないかと。	・引き続き、各学級で互いを認め合う支持的風土づくりに取り組んでいく。		
	⑧ 毎月生活規律と学習指導に関する取組を継続することで、非認知能力を高めていく。	○ 毎月の学年部による話し合いの中で、分析と対策の実施100%	4	○ 教育指導計画や体力向上プランに基づき、全学年で計画的な取組を確実に実施したため、運動を楽しく進んで取り組む児童が増加した。	A	・学校の自己評価は適切である。 ・新型コロナウイルス感染症拡大が収束したら、児童数が少ない現代であるので、縦割り活動を充実させてほしい。	・体育の授業で、めあてに向かってあきらめずに努力する場や時間を確保する。 ・「スポーツタイム」を計画的に実施し、クラスの記録を更新できるように子どもたちの志気を高めていく。		
	⑨ 学期毎に生活面や学習面で少し頑張れば達成できるめあてをたて、意識して生活させる。	○ 児童の毎月の振り返りで8割以上の達成	4	○ 「スポーツタイム」での長縄跳び等の運動を継続的に実施し、クラス毎に回数を更新していく取組が意欲向上と体力向上に繋がった。	A	・子どもたちは、運動場でもしっかりと体を動かしているし、放課後は公園でものびのびと遊んでいる。	・スポーツテストは、外部からの人材の協力を得ながら、効果的に行っていきたい。前年度との記録を比較することで自己の伸びを実感させる。		
	⑩ 朝の活動の時間「Jump up!タイム」に長縄跳びに取り組ませる。	○ 教師の見取り(教育活動評価)で、運動に親しみ最後までやり抜く子どもの達成率3.1以上	3	△ コロナ禍で、活動が制限され、自分のめあてに向かって最後までやり抜くという気持ちにまで高めることができなかった。	A	・地域の人材活用が必要ではないかと。			
いじめ	⑪ 各種アンケートや細かな児童観察によるいじめの早期発見(見逃し0)の取組、早期対応を確実に行う。	○ 学期に1回学校生活アンケートと、面談の確実な実施100%	4	○ 児童や保護者への各種アンケートを確実に実施し把握を行った。	A	・学校の自己評価は適切である。 ・インターネットからの情報が多すぎて、人間同士でのコミュニケーション不足になっているのではないかと。	・「子どもを見つめる会」では、全職員による共通理解を行い、その具体的な対応について話し合うことで指導力を高めていく。		
	⑫ 「いじめ防止対策委員会」による全職員での情報共有を行う。	○ 「いじめ防止対策委員会」の毎月1回の確実な実施100%	4	○ 定期的に「子どもを見つめる会」を実施し、気になる児童を全職員で共通理解し、組織的な対応を行うことができた。	A	・いじめ、不登校の問題を学校全体で共通理解し、対策されているのはとてもいい。	・各種アンケートや相談ポスト、日常的な児童観察を行い、いじめの早期発見・早期対応を継続して行っていく。		
	⑬ 児童の悩みを聞き、担任を中心に組織的に、不安解消に向けた取組を行う。	○ 「いじめチェックリスト」の実施100%、認知したいじめの解消率100%	4		A	・いじめの認知件数が多くなっているようだが、それだけ先生方がしっかりと子ども達の様子を見届けている結果だと思う。	・子どもの問題行動に関する職員研修を計画的に行う。		
不登校	⑭ 「福岡アクション3」に基づく全教職員による実践を徹底する。	○ 「福岡アクション3」の周知徹底100%	4	○ 児童の実態に応じて、保護者や各種関係機関との連携を図り、不登校傾向児童や不登校児童への適切な支援を行った。	A	・学校の自己評価は適切である。 ・学校の指導から切り離して、専門的な人材活用を行いながらリモート授業や指導を行われてはどうか。	・長期欠席児童については、関係機関と連携を図り、早期に登校できるようにするとともに、学校での居場所づくりも行う。		
	⑮ 「子どもを見つめる会」による全職員での情報共有とマンツーマン対応等による組織的対応を行う。	○ 「子どもを見つめる会」の毎月1回の実施100%、生徒指導担当を中心にしたきめ細かな組織的・継続的な対応の実施100%	4	○ 「子どもを見つめる会」を定期的実施し、全職員の共通理解と組織的対応ができた。	A	・「アクション3」に基づく全職員による日常的な取組を実施し、早期発見・早期対応に努めるとともに、子どもたちの気持ちに寄り添える体制づくりを行う。			
	⑯ SC、SCSV、SSW、関係機関との連携した取組を行う。	○ 学校生活アンケートで、「登校意欲」が1.0以上	4		A				
働き方改革	⑰ 定時退校日(水曜日)と、退校時刻(20時)の確実な実施を行う。 業務改善委員会での超過勤務情報の共有と日常業務のさらなる効率化についての検討を行う。	○ 仕事と研修・修養の定義を提示し、月45時間以上の超過勤務なし達成率70%以上	3	○ 学校閉庁時間の設定と保護者への周知、週計画での啓発により、退校時刻までに帰るという意識が高くなっている。 △ 学期末や運動会等の大きな行事がある月が超過勤務が多くなる傾向にあるため、日頃からの計画性と会議等の効率化を図る必要がある。	A	・学校の自己評価は適切である。 ・人を育てる現場で効率を求めると、どこかに歪みが出るのではないかと感じる。仕事内容の見直し等を行うべきではないかと考える。 学校での取組の結果、超過勤務時間については成果が現れていると感じた。今後、行事等の取り組み方について考えて行く必要がある。	・職員会議や各種会議等の実施方法を見直し、効率化を図る。 ・行事などを精選するとともに、自分の仕事に関しては先を見通し、計画的に取り組むようにし、超過勤務時間の縮減を図る。		

◇ 評価について
 ・【自己評価】 A: 目標達成(90%以上) 3: ほぼ達成(70%~90%) 2: もう少し(60%~70%) 1: できていない(60%未満)
 ・【学校関係者評価】 A: 自己評価は適切である B: 自己評価は上方修正すべきである C: 自己評価は下方修正すべきである

令和3年度学校教育活動評価